

レジストラーとアーカイブズ業務に関する事例調査報告

The reserch of the case study about the roll of registrar and archivist in the art museum.

金城 知美 KINJO Tomomi

Okinawa Prefectural Museum & Art Museum has begun a research about of systems to administrate our museum's inventory. As part of the research project, we conducted a case study of the other institutions including art museum and art archive center, especially we focus on the roll of registrar and archivist in the ordinary course of administrating inventory system.

Our museum including strengthen cooperation among the exhibition, conservation and restoration, education, research and study, share the current status of the task, and provide information, integrate an database for we are currently in the process of studying precedent cases of other museums for the purpose of research and consolidating the databases.

We conducted on-site hearings at five institutions, one is inside of Okinawa prefecture, the others are outside of Okinawa, with the personnel involved in the registering and archiving task.

This report pick up the pioneering cases in Japan, one is the Yokohama Museum of Art, going to recruit which employs registrars as dedicated employees, and the other is the Center for Contemporary Art Kitakyushu, with the experience of locally producing contemporary art and project archive experience as a result of a reproduction project at other museums.

はじめに

本年度（2019年度）、筆者は美術館資源発信基盤整備事業の一環として、各事業の業務連携の強化と最新の事業の共有および発信のため、データベース（以下DB）の再編、一元化を目標にレジストラー¹、アーカイブズ業務に関する事例調査を行った。

1. レジストラー（registrar）
収蔵作品の情報管理・登録、作品貸出、
展示の立会い等を担当

当館では美術館事業を、調査研究・資料収集・保存修復・教育普及の4事業に分け、それぞれの担当ごとに事務管理を行っている。特に、各事業の履歴を管理するレジストラーは、DBの統合を目指すうえでの要と考えられるため、資料群の整理と情報公開がどのように行われているのか、情報共有を目的として実施した。

調査対象場所は県内1か所、県外4か所の計5か所になる。本稿では他館事例として黒丸印を付した箇所を紹介する。

（県内）

公益財団法人 沖縄県公文書館（沖縄／南風原町）

（県外）

多摩美術大学 アートアーカイブセンター（東京／八王子市）

武蔵野美術大学美術館・図書館（東京／小平市）

横浜美術館（神奈川／横浜市）●

現代美術センター CCA 北九州（福岡／北九州市）●

2 か所を選定した理由を以下に述べる。

横浜美術館は国内では先進事例となるであろう、作品・資料管理に関わるレジストラーを専任採用している。

当館では所蔵している作品とアーカイブズ資料の整理が途上にあり、研究のための資料の活用と検索が十分にできない状況で、何らかの形で検索できる形にしていきたい。そのために、シンプルで自由度のある検索しやすいDBと、それらの情報を管理するレジストラー業務についてお伺いした。

現代美術センター CCA 北九州（以下 CCA）は、現代美術に関する研究機関（art research institute）として設立され、アーティストを招へいし協働で作品と本を制作、他分野との協議会など多岐にわたるプロジェクトをプログラムしている。

絵画や彫刻など既存のジャンルに収まる作品とは異なり、現代美術の作品は時代によってマテリアルが異なる。映像・インスタレーションは物として残らず、特にパフォーマンスをアーカイブするのは難しい。それらに関するビデオ・写真は作品の記録でしかない。どのようにプロジェクトをアーカイブし、情報公開・提供をしているのか CCA と関わりのある海外事例を含め、お伺いした。

1. 他館事例－横浜美術館

作品や展覧会履歴の管理は、これまでの研究実績の追跡を行うことを可能にし、美術館事業の継続性を維持する上でも、大変重要な業務である。

今後、当館のDBを新しいシステムパッケージへ移行することを検討しており、作品や二次資料のDB上の項目設定方針について以下に記す。

1-1. レジストラーの利点

所蔵作品の貸出のほか、研究資料としての画像貸出や閲覧などの貸出閲覧対応業務は、その業務フローが見えづらくなることもある。

横浜美術館（以下、同館）では画像の管理・貸出をメインとしたレジストラーが在籍していたが、レジストラーの職能を本来の在り方に近づけ、画像の管理・提供だけではなく、収蔵品貸出や収集の業務に携わる機会を拡大しているために、敢えて専任の職員として新たに採用している。そし

てDB上で情報の全体が見えていて、過去の履歴も見られることが必要である理由として、継続して美術館に関わる作品情報、展覧会、修復歴、貸出履歴などが辞書のように“かつてこういう事例があった”という詳細を情報としてすぐに利用者に提供できるようにするためである。

例えば画像の貸出について、実際にカタログなど出版する画像においては規定の貸出業務で行えるが、そうした業務の履歴を残すことで、事例をあとから追跡することが可能になり、業務の効率化が実現できる。

一般的な美術館業務の在り方として、コンサバターとレジストラー、キュレーターとレジストラーの協力関係が生じる場面があるが、それぞれの関係によってレジストラーの役割も変わってくる。同館では専任にしたときに、貸出にも立ち会い、資料収集についても適宜会議に参加し、業務の流れを把握する。単純なデータ登録だけではなく、一連の業務で何が必要なのか、レジストラーに策定してもらう。

業務や契約の内容を継続して見られることが重要で、レジストラーという役職の名前は必ずしも重要ではないといえる。

レジストラーを育成することができれば理想であるが、そういう余裕がなければ現場にいる学芸員がレジストラーの道を切り開く必要がある。現場からやっていき、形となったところで業務を切り離していくことも考えられる。

1-2. 統合的に情報管理をする方法。内と外のDBの管理

同館では長期休館を控え、作品の棚卸作業なども想定される状況のなかで、作家・作品情報の集約が急務となり、日本写真印刷コミュニケーションズ社製のArtizeへのシステム移行が決まったという。

経緯としては、提案型プロポーザルで契約先を決め、その後半年で開発したものを仮納品し、1年間無料の保守期間を設け、少しずつ修正をかけている。その後1年ごとに改訂まで含んだ契約をしている。

現在もDBの改訂・調整の任の中心となるのは現職のレジストラーである。

同館は以前、早稲田システム開発社製の収蔵DBプラットフォームIB Museumを採用し収蔵作品・作家情報を統合的に管理していた。また、FilemakerやExcelなど、それぞれの学芸員が個別にリストを作成・管理していたため、作品・作家情報が散在していた。企画展やコレクション展の準備段階で入手した情報が継続的に蓄積されていない状況にあった。

DBについて、どこのシステムを使うにしても、ある程度の余裕を持ったスペックを前提としたDBを設計したうえでの契約と、運用したあとの保守契約も重要になる。

同館では学芸員から項目追加の要望が次々出てくることが予想し、かなり長い保守期間を含んだ契約をしている。納品して終わりではなく、DBのメンテナンスのほか、今後発生する可能性のある修正対応や、システムそのものの老朽化に対応していく必要がある。

各担当からのデータ集約のほか、特に収集事業に関するデータベースの機能拡充が行われ、Artize のプラットフォームは、細かいニーズへの対応がよく、納品引き渡し後の保守契約も、保守対応も含めて充実しており、システム稼働後の微調整や、登録作業にも柔軟に対応してくれるとのことである。

1-3. 横浜美術館 DB の作品管理について

全ての DB の作品情報に加えて、作品に関連する業務システムの可視化を行う必要がある。以下のものは、収蔵の対象又は館外貸出や今後収集対象となる資料等の年代や地域、制作者等の基本的事項を示すものである。

〈メインとなる情報〉

- ・所蔵コレクション（作家情報含む）
 - …トリミング画像と、外部貸出用の画像を登録
- ・プロパナンス（来歴）
- ・著作権情報
- ・作品の価格情報
- ・貸出と修復歴
- ・画像貸出
- ・コンディションレポート
 - …A 3 両面の Excel データ出力。QR コードも導入しており、端末によるコード読み取りを行うことで、情報と出庫日・入庫日を登録できるようにしている。

〈アーカイブズ資料〉

- ・作品資料
- ・図書資料（展覧会カタログを含む）
- ・雑誌・新聞などの関連資料
- ・作品外資料（下図…水彩素描扱い、作家の書）
 - …「作品外資料」を収集し、M（Materials）の記号を付し DB に登録・公開 [例：西暦－M－通し番号]
- ・その他（エフェメラ…手紙、スナップ写真、チケット等）

〈今後メインになるかもしれない情報〉

同館では、ゆくゆく館の収蔵作家になった時に、直結しそうな情報について、DBに辞書のような形で取引先情報・作家情報を入力し、オファーがきたときに何年頃の価格など記録辞書DBとして取り出し、作品DBに還元できるような形に残していきたいと考えているという。

収集前の作品が収蔵になった際、版画や写真資料の「要マット」や「要修復」など、収集チームのデータ登録に引き継げる形にすれば理想であるとのこと。

美術品収集に係る具体的な項目は以下になる。

- ・取引先情報
- ・未収蔵の作品・作家情報

〈変更時の理由表記〉

なんらかのデータ変更に関する理由表記は、すべて備考に記録する。

- ・日時
- ・項目
- ・内容など

著作権者や遺族の住所で古い情報があれば消すこともある。作品に関連する情報は過去の検討記録になりえるので、履歴に変更日時を残す。変えたことを残すように、ルールを決めて行えばいいが、どうしても漏れてしまうことがある。全ての情報に対して公平に立っている人がいると、客観的に登録し直し、変更メモが落ちない利点がある。

どういう経緯でどこから出てきたのか、誰に頼まれて修正したのか。同館の場合、個人の学芸員のときもあれば分野で全般を担当分けしているので、情報変更の窓口担当としてもレジストラが機能している。

2. 他館事例－現代美術センター CCA 北九州

現代美術においては、表現方法（技法／素材）の多様化とともに、作品を展示・保存するために何が必要になるのか、作品関連情報も多岐に渡るであろう。

開館10周年を迎えた当館で、「求心力の高い収蔵品を収集し、収蔵作品の価値を高める研究を進める」²ことを想定し、収蔵資料の保存・公開と館外利用事例を以下に記す。

2. 「平成28年度 沖縄県立博物館・美術館 中長期計画案」 第2章－5 (1)

2-1. 再制作の展示方法について

CCA プロジェクト・ギャラリーのために制作された作品は、展示終了後ほとんどが解体されてしまうが、指示書を保存している。CCA は作品の再制作の権利を持っているため、もう一度展示したい場合、アーティストが存命であれば必ずコンタクトを取り、再制作を行う。2017 年までの展示作品は移転前の CCA プロジェクト・ギャラリー³のために制作された⁴ことから、再制作となると全く別のものになる。希望する条件や予算で再制作を行う等のやりとりが、アーティストスタジオや所属ギャラリーを交えて発生することもある。

CCA で協働制作したものが売却された作品もあり、売却先が個人の場合はその人の許可が必要となる。

現代アートの場合、例えば 1970 年代に作ったものでモニターを使う作品の場合、当時のモニターをリサーチしなくてはならないが、アーティストと話し合い、代替品を含めてどのような機材を使用するか検討していく。完全に同じように制作することは必要がないし、不可能である。

参考例を二つあげる。

(参考例 1) 2017 年、グッゲンハイム美術館が中国現代美術の展覧会を開催⁵。CCA プロジェクト・ギャラリーが 1997 年に招へいした陳箴 (チエン・ツェン、1955-2000) というアーティストについて、グッゲンハイム美術館から《佛倒／福到》(1997) (図 1) の再制作の方法が知りたいと問い合わせがあり、CCA が当時のスケッチと写真を送っている。陳はファウンデーションがあり、彼の作品に関して CCA が権利を持っているわけではない。多くの人に見てもらうことを前提に協働制作時の資料を提供した。この作品について CCA プロジェクト・ギャラリーの展示では筐を使い、パチンコ台の上に乗せたが、グッゲンハイムの展示ではパチンコ台は乗っていなかった。他の自転車はあるが、全く同じではない。

(参考例 2) ヴィデオ・インスタレーションについて。ライブラリーには、展覧会、個展のカタログ、雑誌などの資料のほかに、CD、ビデオ、DVD などの AV 資料が収蔵されている。そのビデオ・アーカイブの中から歴史的に重要な映像を取り上げ、プロジェクト・ギャラリーにて公開する「ビデオ・スクリーニング」が CCA で行われている。収蔵されているジョン・ケージ (1912-1992)⁶ やマリナー・アブラモヴィッチ (1946-) (図 2) の作品はビデオテープを再生して見せるほかないため機材がないと作品が展示できない。モニターやスピーカーの配置、配線の位置もインスタレーションに含まれる。そのことから 16mm フィルム機

3. 2015 年、八幡東区から学研都市へ移転。

4. CCA プロジェクト・ギャラリー協働制作作品が、他館制作カタログに掲載された場合、コピーライト表記「Center for Contemporary Art Kitakyushu」が入る。

5. 「1989 年以降の芸術と中国：世界の劇場」展 Art and China after 1989: Theater of the World
会場：ソロモン・R・グッゲンハイム美術館
会期：2017 年 10 月 6 日 - 2018 年 1 月 7 日

図 1 陳箴《佛倒／福到》(1997)

Chen Zhen, *Fu Dao/Fu Dao, Upside-Down Buddha/Arrival at Good Fortune*



Center for Contemporary Art Kitakyushu, August 4 - September 5, 1997
http://cca-kitakyushu.org/gallery/19970804_chen/

6. John Cage *Catch 44* 1971, 39:15min, color, sound
Aspects of New Consciousness, Dialogue III 1969, 30min, color, sound
<http://cca-kitakyushu.org/gallery/20170710>

材やVHSデッキ、モニター、スピーカーなど、これまでにプロジェクトで使用してきた作品展示のための必要機材はほとんど所持している。

2-2. 海外のアーカイブ事例

CCAの他、海外の事例として香港にあるAsia Art Archive⁷ (2002-、代表クレア・スー (Clair Hsu)、以下AAA)は欧米からみると、アジア現代美術アーカイブの窓口的な存在である。

AAAは常にアーティストやキュレーターとコミュニケーションをとり続けている。現代美術に関する作品や展覧会のアーカイブ内容の情報更新は、国内外のネットワークが無いと情報が入りづらいため難しい。AAAはアジア美術のアーカイブを率先して集めているため、欧米諸国の研究者などがアジアの例えば1970年代のアーティストについて知りたいと問い合わせがあれば情報を提供できるように環境が整えられている。

アーカイブというと例えば旧蔵書資料などを整理整頓していくという考えがあるが、アーカイブしたものをどのように活用しているのか？

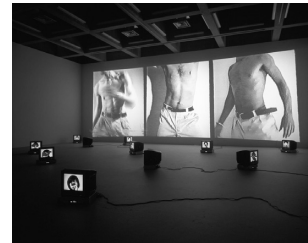
例えばハンス・ウルリッヒ・オブリスト⁸ (1968-)は、90年代からカメラを持ち歩きスナップ写真の他、インタビュー、レコード、雑誌を大量に集めている。また、献本もたくさんあり、それを含めて整理整頓しなくてはならない。整理を引き受けたのはシカゴ美術館 (School of the Art Institute of Chicago) である。この機関は、アメリカ合衆国イリノイ州シカゴ市内にある大学／美術館である。そこにジョセフ・グリッグリー (1956-) というアーティストが教授として在籍しており、彼は耳が聞こえないが、言語学の学者でもある。オブリストの資料を一手に引き受け、シカゴの学生たちも一緒に利用、リサーチしながら整理整頓を行っている。オブリストの資料から、ある人物のインタビューが出てきたことを受けて、関連シンポジウムを開くといった事例がある。このような方法で資料を活用しながら整理していき、展覧会による成果発表を行っていく。アーカイブとは資料を単に見やすくするだけではない。公開・活用していくことが重要である。調査研究した資料を、なんらかのアートプロジェクトとしてアーカイブしながら情報更新する。

オブリスト所蔵資料の整理整頓は、キュレーター志望のアシスタントも入っている。アシスタントにとっても有名キュレーターの元で働けるのは勉強にもなる。

2-3. ライブラリーの整理整頓に関わるモノグラフについて

CCAではアーティストのモノグラフを毎年調査しながら、プロジェク

図2 Marina Abramovic *The Hunt*
1998, multi-channel video



Center for Contemporary Art
Kitakyushu, 2001
http://cca-kitakyushu.org/gallery/20010319_abramovic/



Center for Contemporary Art
Kitakyushu, 2019
http://cca-kitakyushu.org/gallery/20191028_project_abramovic/

7. AAAは「1989年以降の芸術と中国：世界の劇場」展のアーカイブセクションをグッゲンハイム美術館と協働で開催。
<https://www.guggenheim.org/exhibition/art-and-china-after-1989-theater-of-the-world>

8. ロンドンのサーペンタイン・ギャラリーの芸術監督。

ト・ギャラリーに招へいするアーティストをピックアップして展覧会へ展開している。それが難しい場合はカタログを収集している。ひとりのアーティストについて調査するのは、カタログの収集と展覧会調査（美術館やコマーシャルギャラリーなどの活動履歴）。

CCA の収集条件は、

- ①現代アートに限定する
- ②だいたい 1980 年以降、インターナショナルで重要なもの
（アーティストブックや展覧会カタログ、図書、映像資料など）
- ③インターナショナルで活動しているアーティスト
- ④できれば英語表記

（ドイツ語、フランス語、イラン語もあり展覧会開催国は多岐にわたるが、英語表記があると好ましい）

世界中に美術関係施設があり、展覧会関連資料として発行されるカタログも多種多様にある。それを全部網羅するというよりも、アーティストや、キュレーターと対話し、美術史に沿うものや世界的に有名な建築家、科学者、アーティストが他分野と協働している活動（Interdisciplinary）をみていく。それから、ディレクターとプログラムディレクターが相談しながら、評価の高い展覧会カタログを集め、年ごと、どこの都市で開催されたのか分類する。

良いカタログは大抵話題になる。故にアーティストやキュレーターなどと日頃から情報交換できる関係性があると望ましい。

2-4. 図書の収集・公開

現代美術の場合、海外のカタログを一括して閲覧できることが重要である。

CCA も全部は揃っていないものの、ドクメンタのカタログは第5回から収集しており、ヴェニスビエンナーレのカタログ、Parkett（スイスのチューリッヒ発行、編/Bice Curiger）、FLASH ART（イタリア発行）はパイロット版から収集している。

アーカイブはニーズに応じて変更するのではなく、研究資料として収集・保存しないとイケない。自分たちのコレクションについて、関連する作品はどこの美術館で閲覧可能であるのかといった、関連する情報も提供できればいい。このコレクションはどこに行けば閲覧できるなどの情報を利用者に対して情報公開することによって、研究の可能性が広がる。

ライブラリーを見たときに、利用者が関連する情報を持っていないと、例えば美術作品の年代が近代なのか現代なのか、探したいものがはっきりしていないとモノに行き当たらない。たとえ曖昧な情報でも入力すると芋

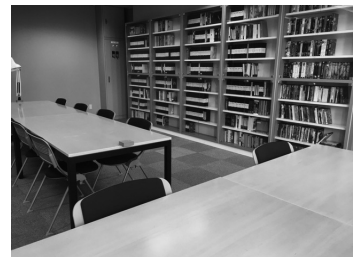


写真1 CD、ビデオDVDなどのAV資料・閲覧スペース

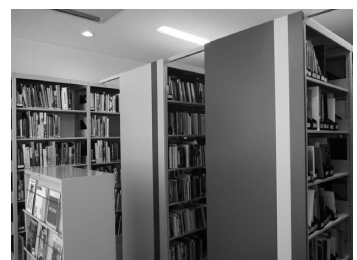


写真2 CCA 八幡東区時のライブラリースペース

づる式に出てくるように、作品情報を検索するときにも、関連情報が付属した簡易検索があってもいいのかもしれない。そういった DB の構築は、手入力になるため手間がかかるが、関連情報が充実したアーカイブは重要な財産となるはずである。

おわりに

作家情報や展覧会履歴など、情報は入力と同時に常に更新しながら、公開していくことが重要になる。そうすれば、インターネットを活用した情報公開と同時に、内容の精査も行うことができる。

当館の DB 再構築とデジタルアーカイブ⁹については、オンライン公開できていない現状もあり、引き続き課題はあるが、アーカイブ資料として今後活用できる二次資料整理は既に着手しており、資料のデジタル化、Excel によるリスト化を進めている。将来的になんらかの方法で閲覧に供することを検討しており、県内美術情報の有効的で活用力の高い DB の構築¹⁰は着実に進んでいるとも考えられる。調査中の資料群については以下になる。

・写真資料

フィルム、プリント、コンタクトシート、スライド類

・紙資料

（作家資料）スケッチブック、エスキース、エフェメラ、書簡類

（研究資料）草稿、印刷原稿、調査資料、スクラップブック類

二次資料調査については、大学のプロジェクトとして美学・美術史を専攻する学生と協力して DB の構築を進めることも考えられるかもしれない。キュレーター養成アカデミックプログラムを作り、大学と連携するなど、外部団体と協力し、アーカイブ資料整理を行う提案をすることも可能である。

謝辞

本論の執筆にあたり、調査ならびに情報提供のご協力を頂きました、横浜美術館の相原佳奈子氏、坂本恭子氏、現代美術センター CCA 北九州の山田綾子氏に、厚く御礼申し上げます。

9. 謝花聡恵「博物館資料のデジタルアーカイブとデータベース研修報告」『平成31年沖縄県立博物館・美術館美術館紀要第8号』86頁。

10. 大江悠記「データベースの再構築について」『平成27年沖縄県立博物館・美術館美術館紀要 第5号』80頁。